

ニューノーマル時代に アートで人をむすぶプロジェクト



報告書

ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト

主催：アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

助成：令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業



はじめに

このプロジェクトは、コロナ以降、ニューノーマル時代のコミュニケーションが、誰にとっても開かれたものであるように、「障害」「地域」というテーマに対して、アートをとおしてできることはなにか、考え、形にしていくことを目指して行ったものです。

2019年末、出現した新型コロナウイルスの感染拡大は、人と人とのむすびつきにも影響を及ぼしました。ソーシャルディスタンスの確保や、オンライン会議など、いま、私たちのコミュニケーションは、「触れ合わない」、「対面しない」というニューノーマル（新たな常態・常識）時代に突入しています。多くの人がこの新しいコミュニケーションの形に順応する中で、これに馴染めず、関わりを奪われてしまったと感じている人たちもいます。

いま、私たちに求められているのは、この変化により、見過ごされかねない人たちのことを想像し、誰一人取り残すことないように取り組んでいくことではないでしょうか？

世の中の仕組みが変わっていく中でも、誰もが社会とのつながりを持ち続けるため、本プロジェクトでは「障害とアート」、「地域とアート」という2つの切り口から、人と人をむすぶ、様々な企画を実施しました。

障害、地域、それぞれの領域において、この未曾有の状況を切り抜け、笑顔で暮らしていくための一助となれていたらと願います。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、多大なるご協力をいただきましたすべての皆様に、心からお礼を申し上げます。

2022年3月

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

実行委員長 牛谷正人

障害とアートの ニューノーマル

みんなの“鑑賞”1

障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。

プロジェクトメンバー 河原崎未識、外山聖、野原健司、森美菜子、安田真一郎

みんなの“鑑賞”2

しが盲ろう者友の会の人たちと考える。

プロジェクトメンバー 岡田昌也、岡本克司、北川雅貴、野中美智子、安川雄基

障害のある人とアートの間を開く距離を縮めるためにはどうすればいいのでしょうか？
「見えなさ」「聞こえなさ」や「機会のなさ」などから生まれる「縁遠さ」の解消を、
障害当事者とともに考え、実践したプログラムです。



みんなの“鑑賞”とは

アートとの接し方をほぐす

—美術鑑賞は、人の数だけ。

「障害とアートのニューノーマル」として行ったのは、「みんなの“鑑賞”」という取り組みです。

これは、誰もがアートを楽しめるように、美術鑑賞の方法を、知的障害のある人や盲ろう者が、アーティストらと一緒に考えるという企画です。

この企画で生まれた鑑賞方法は、NO-MA企画展「79億の他人」で展示しました。

また、会期中に、鑑賞方法を考えたメンバーの解説付きの作品鑑賞会も開催しました。

それぞれ考え出された鑑賞方法は、アートの接し方をほぐし、ニューノーマルな時代の美術鑑賞の可能性を示してくれました。

みんなの“鑑賞”1
障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える。



みんなの“鑑賞”2
しが盲ろう者友の会の人たちと考える。



みんなの“鑑賞”1

障害者支援事業所いきいき+ 野原健司と考える。

どんなねらいで、誰と？

多くの美術館では、ケースや額に収まった作品と、作者や作品のことを説明する文章が書かれた紙やパネルがあって、館内の音は静かで、空間は整然としている—こうした空間づくりには、作品の安全を守り、なるべく雑音や余計なもののない環境で来館者に作品を見てもらおうとする美術館側の工夫が反映されています。ですが、それとは違う自分に合った環境で鑑賞したいと考える人もいるはずで、その分それぞれのアートの楽しみ方があっていいのかもしれない。

この企画では、障害者支援事業所いきいきの利用者や支援者の方々、アーティストの野原さんと一緒に、「作品をどうやって鑑賞するのがよいか？」ということについて考えました。展示するのは、野原さんによる美術作品。いきいきの利用者3人が中心となって考えたそれぞれの「こう見たい!」を形にしました。



メンバー

河原崎未識 (障害者支援事業所いきいき)

外山聖 (障害者支援事業所いきいき副所長)

野原健司 (アーティスト)

森美菜子 (障害者支援事業所いきいき)

安田真一郎 (障害者支援事業所いきいき)

鑑賞方法ができるまで

それぞれの「こう見たい」を実現するために

野原さんの作品を他のメンバーが見て、自分だったらどうやって作品を鑑賞してみたいか話し合いながらアイデアを出していく形で、プログラムは進んでいきました。

お話しするのが好きな河原崎さんは、「作品を見た感想を誰かに伝えたい!」という思いから、「お話ししたい人はステッカーを付けて、ステッカーを付けている人同士でおしゃべりできるようにする」という方法を考えました。

森さんは、「自分の感想もシェアしたいし、他の人の感想も知りたい」とのこと。そこで提案されたのが「作品の感想をふせんに書いて、ボードに貼ってシェアする」という仕組みです。

「静かに作品を見たい」「遠くから作品全体を眺めていたい」という安田さんの理想は、会場に安田さんの「ベストポジション」を作ることによって具現化しようと考えました。また、メンバー全員から「作品の高さを、見る人の目線に合わせて動かせるといい」という声も上がりました。

これらのアイデアを、試作品などを使ってメンバーに検証してもらい、それぞれが考えた鑑賞方法を形にしていきました。

7月9日(金) 第1回検討会議

初顔合わせとなった第1回検討会議。メンバーとの自己紹介の後、実際に美術作品の鑑賞を体験しました。作品鑑賞の後は、場所を移して、この日の鑑賞についての感想や、今後、どのように作品を鑑賞してみたいかを話し合いました。

8月19日(木) 第2回検討会議

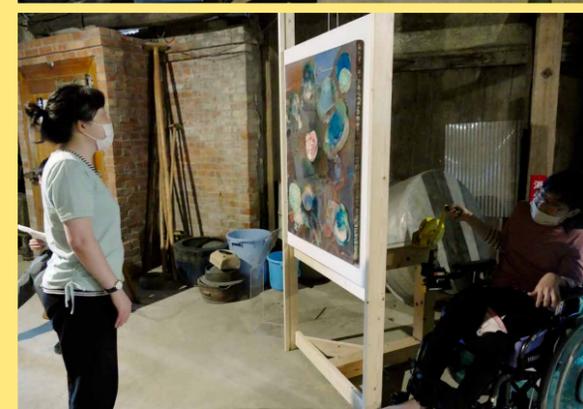
障害者支援事業所いきいきに場所をお借りして実施。野原さんの作品の展覧会のようにになりました。それぞれゆっくり作品を見た後、気になる作品について、自分だったらどうやってその作品を楽しみたいか話し合いながら、アイデアを出しました。

9月3日(金) 第3回検討会議

プロジェクトメンバーが選んだ野原さんの作品を、展示会場の「まちや倶楽部」で実際に見てみました。そして、それぞれのメンバーの「こう見たい!」を、試作品などを使って体験し、皆さんに意見をお聞きました。残すところあと1回ですが、皆さんのアイデアの具現化に向けて、かなり具体的な調整段階に入ってきました。

9月16日(木) 第4回検討会議

最後となる検討会議では、プロジェクトメンバーに展覧会の設営に立ち合ってくださいました。野原さんの作品を展示すると同時に、それぞれが考えた作品の楽しみ方を、前回の会議で出た意見をもとに確認していきます。考えたことが目の前で実現していくその喜びを、メンバーも、スタッフも味わいました。



各会議の様子は、ブログで公開しています。
こちらのQRコードよりご覧ください。



5つの鑑賞方法

4回の検討会議を経て、5つのユニークな鑑賞方法が生まれました。

①みんなで考えた

「絵の高さを変えられる壁」

絵の裏にあるハンドルを回すと、絵の高さを変えられます。「自分ならこうかな」という高さに合わせて絵を楽しめます。



②安田真一郎さんが考えた

「ベストポジション」

安田さんの理想は、1人で静かに作品全体を見まわすというもの。椅子に座ると、そんな安田さんの目線で展覧会を楽しめます。



③外山聖さんが考えた

「あなたのベストポジション」

受付に、貸し出し用の椅子が置いてあります。お気に入りの作品を前に腰かけられます。



④森美菜子さんが考えた

「感想シェアボード」

作品を見た感想などをふせんに書き、ボードに貼ります。ふせんには、表情が描かれたシールを貼ることもできます。



⑤河原崎未識さんが考えた

「おしゃべりステッカー」

作品や展覧会について誰かとお話したい人、お話ししてもいい人は、「おしゃべりしながら楽しみたい」ステッカーを付けます。だまって作品を見たい人、話しかけられるのはちょっと苦手という人は、「おしゃべりしないで楽しみたい」ステッカーを付けます。



NO-MAご近所、動画なRADIOの収録から

※同プロジェクトの1つであるラジオのプログラムで話した内容のまとめです。プログラムの詳細は36pをご覧ください。



障害者支援事業所いきいき

森 美菜子 Mori Minako

障害者支援事業所いきいき 副所長

外山 聖 Toyama Satoshi

アーティスト

野原 健司 Nohara Kenji

「みんなの“鑑賞”1」のプロジェクトメンバーである森美菜子さん、外山聖さん、野原健司さんがプロジェクトを振り返り、参加した感想や印象に残っているエピソードを語っていただきました。



—作品を鑑賞する機会はありますか？

森：見たことはありましたが、このお仕事をやるまでは、ほとんどと言っていいほど興味がありませんでした。だから、本当に初めてで、やったことのないものだったので、「どうしよう」って思っていました。

外山：美術はもともと好きで、いきいきから利用者さんが作られた作品を「ing展」^(※)で展示させてもらっていました。今回は、作品を見る方法を考えるという逆の視点でお話をいただいたので、どうなるかなと思いつつながら、参加させてもらったという流れです。

—今まで美術館に行ったり作品を鑑賞したりすることはあまりなかったということですが、参加して変化はありましたか？

森：変化はありました。私たちが考えることではないんだろうなと思っていましたが、このお仕事をさせていただいて、私たちも展示のお手伝いをさせていただいていいんだと思いました。

—野原さんは、今回ご自身の作品を出展していただき、一緒に展示方法を考えるという少し違う立場でもありましたが、参加してみえていかがでしたか？

野原：すごく刺激的だったのは、出展する作品を選んでいただくために、いきいきさんの施設に作品を持って行ったのですが、それが図らずも出張展示みたいな感じになったことでした。普通は作品を作って美術館やギャラリーという場所に置いて見に来てもらいます。こっちから出向いて、いわゆる日常の側に作品を持ち込んで、僕にすれば非日常なんですけれど、作品を見るというのはすごくやってみたかったことでした。こういうところに行って、その場所で展示を考えてコミュニケーションを取るのは新しいなと思いました。

外山：実際、この時もプロジェクトメンバー以外の方も見ていたので、こういう機会があるとどんどん鑑賞の場が広がっていきなと思いました。利用者さんが芸術に触れる機会は少なく、活動も少ないので、今回のプロジェクトはよかったなと思います。

※2004年からNO-MAを会場に毎年開催されてきた、「滋賀県施設・学校合同企画展 ing… ～障害のある人の進行形～」の略称。

プロジェクトメンバーの声

「最初は私にできるのかと不安がありましたが、参加させてもらうにつれて、私にもこんなことができるんだと実感することができました。そして私の提案が形になったことが私はずごくうれしかったです」

森さん

「僕のNO-MA[※]の経験から素朴に感じる人が多いですが、一人一人の個性がある中で周りの方に喜んでいただきたいと思います」

安田さん

「自分のペースで、楽しく、参加できました」

河原崎さん

「障害のある人と携わっているので、ある程度イメージはしていましたが、それを超えるくらいおもしろいことを皆さんが提案されたので、新鮮で、自分の考えもやわらかくなったと思います」

外山さん

普段は美術館の白い壁に四角い作品を掛ける方が作り手としては楽なので、それに乗っかっていたりするのですが、でもそれ自体中世の貴族によって作られたシステムなので当然ブラッシュアップしていけばいいし、いろんな視点がすごく参考になりました。

野原さん

※ボーダレス・アートミュージアムNO-MA。「みんなの“鑑賞”」で考案された鑑賞方法を展示した展覧会「79億の他人」の主催者。

アンケート結果

プロジェクトメンバー

回答者：3人(障害者支援事業所いきいき利用者)

質問1：このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか？

はい 100%

質問2：このプロジェクトに参加してよかったことはありますか？(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろいろな人たちと出会えた	3
自分が提案したことが形になった	3
新しい体験ができた	2
話し合いの場に参加できた	2
作品を見て楽しむことができた	2
自分の考えを発表できた	1
その他	0

鑑賞会参加者

回答者：4人

質問1：鑑賞会は、いきいきの皆さんや野原さんと一緒に楽しみましたか？

はい 100%

質問2：鑑賞会でよかったことはありますか？(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろんな鑑賞方法に出会えた	3
河原崎未識さん・森美菜子さん・安田真一郎さん・外山聖さん・野原健司さんの話を聞いた	3
「みんなの“鑑賞”」について知ることができた	2
いろんな鑑賞方法を体験できた	2
〇〇さんと話げできた ・野原さん	2
その他 ・作品の経過等一部知ることができた ・説明を受けてよくわかった	1

質問3：いきいきの皆さんと野原さんが考えた鑑賞方法について感想を教えてください。(複数回答有)

選択肢	回答者数
充実した作品鑑賞ができた	3
こういう見方があるのかと思った	3
もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい	3
自分だったらどう見てみたいか考えさせられた	1
自分も同じようなことを思っていた	0
今後、活かそう	0
その他	3

質問4：アートを通じて、障害のある人やマイノリティの立場にある人とともに生きやすい社会を作ろうとする考え方がありますか。この考え方に可能性を感じますか？

はい 75% 無回答 25%

足をのばしてみる

山田創 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA学芸員

本事業の実施中の昨年(2021年)9月に『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』(著者:川内有緒、発行:集英社)という本が出版され、面白く読みました。「見えない」白鳥さんが、「見える」人とともに美術館に行き、対話をしながら展示作品を楽しむという独特の鑑賞方法に焦点を当てて書かれたノンフィクションです。また、10月には、国立民族学博物館で、全盲のキュレーター・研究者の広瀬浩二郎さんによる企画「ユニバーサル・ミュージアム — さわる!“触”の大博覧会」が開催されましたが、なんとすべての展示物をさわっていいという驚きの内容でした。このように、昨年の動きだけを見ても、国内における障害者と美術鑑賞に関する動きは活発だといえそうです。

障害者と美術鑑賞を取り結ぶ法律に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」(2018年公布、施行)があります。同法では、国及び地方公共団体に対し、「障害の特性に応じた文化芸術を鑑賞しやすい環境の整備の促進」を求めており、具体的手段として「作品等に関する音声、文字、手話等」を例示しています。これらは聴覚障害者や視覚障害者に向けた情報保障と読み取ってよいでしょう。

なにが言いたいかというと、障害者と文化芸術の「鑑賞」に関しては、多くの場合、視覚や聴覚(特に近年は視覚障害に対しての)の感覚障害の領域で実践され、注目を集める傾向が強いということです。しかしながら、法律のタイトルにも「障害者による」とありますし、他の障害と美術鑑賞の結びつきについても考えられるべきではないでしょうか。

あるいは、本事業の中核館に位置づくNO-MAは、これまで多くの知的障害のある人

たちに接し、共同して展覧会を作ってきました。全国的な盛り上がり、法解釈、NO-MAのアイデンティティ、これらの背景が、今回のプロジェクトの補助線になっていたものと思います。

活動が本格化する前にメンバーの皆さんに美術鑑賞についての関わりについて聞いてみました。すると、「美術館はほとんど行かない」「絵もあんまり見ない」という回答が返ってきました。統計的なデータでなく、限定的な聞き取りですが、ともあれ、今回協力いただくことになった皆さんと美術鑑賞の間には、一定の距離感があるものとし、活動を進めていきました。

知的障害は、感性をくくる概念ではない

とはいえども、知的障害者と美術鑑賞の距離を考えるとすることは簡単なことではありません。あたりまえのことですが、知的障害者は同じ感受性をもった集団では決してなく、医学的、法律的にくらわれているだけであり、それぞれの趣味趣向を生きる個別の人たちです。

前段で取り上げた視覚障害者と聴覚障害者と美術鑑賞の取り組みは、法律における点字や手話、その他の代替的な情報保障手段などの例示にも表れているように、見えなさ・聞こえなさを前提に作品を巡る情報を別の情報に置き換えて味わおうとする、いわば翻訳的な方法論があり(翻訳と同じく正解があるわけではないですが)ある程度、定式化が可能で、事実、冒頭で紹介した白鳥さんの対話を伴う鑑賞や、広瀬さんの「さわる文化」の展開など、豊かな実践が積みあがり、他の団体の活動へ広がり、いろいろな現場

で、美術の楽しみが共有されているものと思います。

しかしながら、こうした「定式化」のプロセスを、知的障害と美術鑑賞の関係に押し広げるべきではないと思います。つつい(わたしも含め)「知的障害者にとって有効な鑑賞方法を考えよう」という思考が働きそうなものです。ですが、上に見た方法論は、見えなさ・聞こえなさという感覚モダリティの差異を埋め合わせるための共通言語(手話や点字がそうであるような)の構築なのであって、知的障害者と美術鑑賞を巡る問題とは分けて考えられるべきです。感覚障害の領域で発展した成果を引き継ぎ、「ある程度定式化できるはず」として知的障害者に一定の共通性を幻視することは、極端なグルーピングに陥る危険性を孕んでいます(「わかりやすい日本語」などの言語表現上の配慮は重要な視点ですが)。

言い換えれば、「知的障害者に適した鑑賞方法はこうしたらいい」といった風に、特定の方法論を軸にして知的障害者と美術鑑賞を貫くことは、全体性において各個を丸呑みするような乱暴な理解につながりかねないということです。繰り返しますが、知的障害者というくりに位置付けられた人々は、本来的には集団ではなく、それぞれの趣味趣向を生きる個別の人たちです。

オルタナティブなルール設計へ

では、どう考えるべきでしょうか? 前言を翻すように聞こえるかもしれませんが、いくら全体性からの逃避を念頭に置いたとしても、現に「知的障害」が一つの社会的なくりとしてあるのは事実です。ですが、それはもっぱら社会的なくりであるという、「社会モデル」的な見地が重要であろうと思います。つまり、障害が生じているのは、美術を「縁遠い」と感じさせてしまう社会の方であり、そこに目をむけることこそ重要であると考えます。ですから、今回の取り組みでは、社会との距離を表す「縁遠さ」について、考える方向に向いていきました。

こうした課題意識の下、担当者の間でも議論を重ね、非常にシンプルな事業の設計

が行われました。それは、「美術鑑賞がどんなふうだったらよいでしょうか」ということをメンバーたちに尋ね、それを実現する方法とともに考えていくというものです。その結果は、前ページまでにまとめたとおりですが、とても面白いものができたと考えています。背後にあるのは、個々人の個性、それは「おしゃべりが好き」、「じっくり言葉にしたい」、「基本的に静かに1人でいたい」といった各人らしさに起因するものとなっています。

わたしは皆さんとの楽しかった思い出とともに、どのアイデアもどことなく可愛らしく思えたりもするのですが、見る側が作品の高さを変えたり、思いをふせんに書いて作品に添えたり、インタラクティブを越して、鑑賞者優位の介入的な視座が導入されたことは、美術鑑賞の「当たり前」を逆照射する、オルタナティブなルール設計になったと感じています。きっと「縁遠さ」をばねにした皆さんのアイデアが、開いていた距離分のラディカルさをもって骨肉化されたのだと思います。個人的な感想ですが、今回の一連は、皆さんと知恵を共有しながら、自分がなんとなく守っていたルールの外に足をのばしてみるような体験であって、それはなんだかとても、愉快なことでもありました。

最後になりましたが、プロジェクトに並走してくださった、障害者支援事業所いきいきの河原崎未織さん、外山聖さん、森美菜子さん、安田真一郎さん、アーティストの野原健司さんに、この場を借りて、厚く感謝申し上げます。

みんなの“鑑賞”2

しが盲ろう者友の会の 人たちと考える。

見えない・聞こえない人といかにして鑑賞を楽しめばよいか

盲ろう者とは、目(視覚)と耳(聴覚)の両方に障害のある人のことです。彼らは、テレビ、ラジオや記事を楽しんだり、人と会話したりすることに難しさがあります。日本には、こうした盲ろう者がおおよそ14,000人いると推定されています。盲ろう者にとって「触る」ことは、生活に欠かせないものです。それは、盲ろう者がこの世界のことを知るための、唯一とっていいほどの手がかりであり、生きるためのアクションです*。

一方で、新型コロナウイルスの出現以降、ソーシャルディスタンスやリモート会議などの非接触をベースとしたコミュニケーションが格段に増えました。触れないことで身を守ろうとするニューノーマルが形作られているその途上にあるからこそ、私たちは今一度、触れることが不可欠な盲ろう者の暮らしについて考える必要があるのではないのでしょうか。この企画では、この時代において、アートの視点から盲ろう者とのコミュニケーションを考えました。視覚と聴覚以外の方法で、盲ろう者ととことん作品を鑑賞し、そして、その結果、彼らがどのようにアートを捉えたかということをも形にして、展示しました。鑑賞を通して、「見えない、聞こえない人」の捉えた世界があらわれ、「見える、聞こえる人」と感覚が共有され、コミュニケーションが開かれていく、そんな取り組みとなりました。

*「盲ろう」は、その見え方や聞こえ方の程度によって、大きく分けると、(1)全盲ろう、(2)弱視ろう、(3)全盲難聴、(4)弱視難聴の4つに区分されます。加えて、先天性か、後天性かということもあり、その障害像を一口にくることはできません。他方、情報の取得にあたり、「触覚」が多くを占めていることは、盲ろう者に共通していることです。



メンバー

岡田昌也 (NPO 法人しが盲ろう者友の会理事長)

岡本克司 (NPO 法人しが盲ろう者友の会副理事長)

北川雅貴 (NPO 法人しが盲ろう者友の会理事)

野中美智子 (NPO 法人しが盲ろう者友の会事務局)

安川雄基 (合同会社アトリエカフェ代表)

鑑賞方法ができるまで

大事にしたのは、「さわる」と「対話」

「さわる」ことで、作品の形や質感などを体感します。「対話」は、さわって得られた感想を他の誰かと共有し深める意味があります。

盲ろう者と、見える・聞こえる人がともに作品をさわり、対話を深めることで、作品の鑑賞を行いました。

「みんなの鑑賞」に参加した盲ろう者は、岡田さん(全盲ろう)、北川さん(全盲ろう)、岡本さん(弱視難聴)です。

カッコ内はそれぞれの障害状態像ですが、岡田さん、北川さんは、触手話を通じてコミュニケーションをとります。岡本さんは、サウンドプロセッサ(人工内耳の受信装置)に接続したマイクに話す音声コミュニケーションです。

対話相手になったのは、アーティストの八幡亜樹さん(見えて聞こえる)、空間デザイナーの安川雄基さん(見えて聞こえる)、社会福祉法人グロー職員の石田瞳さん(近視、聞こえる)です。

次のような方法で鑑賞を行いました。机の上に作品を置く。机の一方には、見える人、もう一方には盲ろう者と通訳・介助者です。双方が作品にさわり、感想を交換することで作品への考えを膨らませていきます。

対象とした作品は、佐々木卓也さんの作品で、独特のポーズを取る陶製の女性像です。さて、どんな鑑賞体験が生まれたのでしょうか?交わされた会話を次の見開きで見てください。

7月1日(木) 第1回検討会議

顔合わせともなる1回目の検討会議。盲ろうのプロジェクトメンバーは、1人お休みで、岡田昌也さんと北川雅貴さんのお2人の参加となりました。試した方法は、「見えない・聞こえない」人と「見える・聞こえる」人同士がペアになり、互いに作品をさわった感想やイメージを、触手話による通訳を介して、話し合うというもの。振り返りの中では、「楽しかった」という感想が。「さわる」「対話する」という方針が固まりました。



8月6日(金) 第2回検討会議

プロジェクトメンバーである岡田さん、岡本さん、北川さんの3人全員が出席。第1回では、ペアになって作品を鑑賞しましたが、今回は、さらにもう1人「対話相手」に加わっていただき、3人で作品をさわって、話し合いながら作品を楽しみました。成果発表に活かすための動画も撮影しました。



8月25日(水) 第3回検討会議

第3回目の目的は、作品を挟んで対話した記録を、鑑賞した作品とともに展覧会で紹介するためのプランとその内容の検討です。岡田さんのみの参加となりました。マインドマップのように対話者が話した言葉を散りばめた盤面がついた展示台を作るプランを共有しました。この会議で岡田さんからいただいたご意見から、盤面に点字もつけることや、情報だけではなくてさわって楽しめるようなモノを配置することなど、方針を修正しました。



9月17日(金) 第4回検討会議

最後の検討会議には、岡田昌也さんと岡本克司さんが出席。完成した展示台を確認していただきました。岡田さんは、ご自身で点字を読みながら確認され、岡本さんは、通訳介助者やスタッフが言葉を読み上げるのを聞きながら、盤面をさわって鑑賞しました。作品をさわりながら発言した内容を思い出しながら、あるいはほかのメンバーが同じ作品をさわってどのように感じたのかを確かめながら、鑑賞いただきました。



3通りの対話録

作品をさわりながら盲ろう者と見える・聞こえる人との間で対話を交わしました。その結果、興味深い3つのコミュニケーションが生まれました。それぞれの対話の一部を紹介します。

岡田さんと八幡さん

八幡：「世界」をどのように感じ取っていますか？

岡田：映画とか漫画とか昔の記憶と結びつく。女の子は髪の毛が長かったという記憶があった。

八幡：芸術というものは好きですか？

岡田：昔はものづくりとか写真が好きだった。見えなくなったらはやはりあまり興味がないですね。家の中のお仏壇とか、手触りで、過去の記憶が残っている。形も好きですが、いろんな色があるのも好きです。いろんな色がついていると、気持ちも明るく元気になるように思います。

八幡：今日の岡田さんのシャツ、カラフルで腑に落ちました。



岡本さんと石田さん

岡本：人かと思ったけど、意外なところに突起があったので違うかな。

石田：不思議なポーズをしているので、人間とはわかりにくい形になっています。

岡田：あぐらをかいているのはイメージできたので、男性かなと思いました。女性と聞くと、あまりべたべたとさわってはいけない気持ちに。

石田：肌の色は濃いブラウン。不思議なのは、手足がカラフル。おとなしくはなさそう。

岡田：女性がスカートにあぐら？(視覚的に)おとなしくなさそう？

自分のタイプではないかも。視覚的な作品イメージを聞くと感触が変わった。最初よりも柔らかいように思います。



北川さんと安川さん

北川：(真ん中の腕の部分をさわって)赤ちゃんを抱いているのかな？

安川：僕には0歳の子供がいます。たしかに床に座って抱っこしていると似た体勢になります。僕には考えごとか、悲しそうな顔をしている女性のように見えます。

北川：赤ちゃんに、早く寝てほしいと思ってるのかな。

安川：この女性がどんなことを思っていると想像しますか？

北川：旦那さんがかまってくれないのかな？育児疲れかな？

安川：僕は最初、赤ちゃんを抱っこしているようには見えませんでした。育児が大変な女性に見えてきました。



対話の具現化

作品の展示と、対話内容の記録が一緒になった展示台をつくりました。

この台は、参加した盲ろう者の皆さんにも意見をいただきながら改良を重ねて、つくりました。

台から飛び出たボードを読むことで3通りの対話の流れを俯瞰できるようになっています。このボードの文字は点訳してもらい、参加してもらった盲ろう者にもさわってもらいました。自分以外の参加者の対話録を読んでいたことは、このプロジェクトにおいても、とてもよい部分であったと感じます。「〇〇さんはこう見たのか、全然違うのがおもしろい」というような感想をいただき、むしろ本編より楽しんでいらしたかもしれないという所感を持ちました。

盲ろう者が自らの鑑賞体験を追体験できるのと併せて、来場者の人たちにも無料公開し、今回の取り組みを知っていただくためのものにもなりました。

NO-MA ご近所、動画な RADIO の収録から

※同プロジェクトの1つであるラジオのプログラムで話した内容のまとめです。プログラムの詳細は36pをご覧ください。



しが盲ろう者友の会 理事長

岡田 昌也 Okada Masaya

しが盲ろう者友の会 事務局

野中 美智子 Nonaka Michiko

アトリエカフェ 代表

安川 雄基 Yasukawa Yuki

「みんなの“鑑賞”2」のプロジェクトメンバーである岡田昌也さん、野中美智子さん、安川雄基さんがプロジェクトを振り返り、参加した感想や印象に残っているエピソードを語ってくださいました。

—さわれないことが当たり前となっている美術作品を、今回は一緒にさわりながら感想を分かち合うという鑑賞会を行いました。この鑑賞について、どのように思われましたか？

岡田：実際にさわって、感じたこと、思ったことを話し合うのは、大変いいなと思いました。

聞こえる人たちと一緒に、作品を通してふれあい、楽しみながら盲ろう者への理解を広めていければと思いました。

—以前に、「盲ろう者には、情報が不足している。同じ人間としてお互いに情報交換がしたい」と仰られていましたが、そのことについて、詳しくお聞かせ願えますか？

岡田：鑑賞会では、聞こえる人たちもいて、作品をさわりながらお話しをしました。そのときに、私は子どものころに見た映像の話をして、「知っていますか？」と尋ねると、「知っています」と言われ、一緒だと思いました。また、別の漫画の話をするとその方も覚えていて、「一緒だね」と言ってもらい、その場がとても楽しかったです。私は、歴史も好きですし、趣味や興味あることなど、いろいろな話をしてもっと知りたいと思いました。

—野中さんは、岡田さんが仰ったように、盲ろう者の方が普段から情報交換する機会が少ないと思われませんか？

野中：そうですね。いろんなところで、どうやって盲ろう者と話したらいいのかという話を伺います。そんなの簡単なことで、「ここ(手のひら)に書いてくださいね」とかで通じるんです。ただ、ノウハウがいまだに知れ渡っていないというか、それだけで話せない人がいるっておかしな話ですよ。情報を伝える際、手のひら書きでは大変な部分もあるんですけど、もっと情報が入れば、本当は自由に動けるはずなんですよね。

安川：今回、1つの作品を対比して、例えば思い出話とか、視覚で見ている自分では全然そんなことは思わなくて、「どこからそう思ったんですか？」みたいな会話になるんですよ。普段、会ったときにできない話が鑑賞会ではできたので、日常的にこういう展示みたいな機会があると、活発にいろんな人とコミュニケーションが取れるんだろうなとすごく思いました。

プロジェクトメンバーの声

「盲ろう者だけでは楽しくないかも。色んな人と出会えてよかった。今まではその時だけの参加だったが、話し合いから参加できてよかった。盲ろう者も同じ人間として情報を交換したい」

岡田さん

「ガラスの作品※には、イメージがわきにくいところがあった。作品から、自分の考えが表現されてよかった」

岡本さん

「粘土のイメージが難しかった」

北川さん

「今回の展示は、盲ろうの人の頭の中をのぞいているよう。盲ろうの人が話していたことを支援者やその相手の方だけではなく、それ以外の人にもわかってもらえることができるんだということがわかった」

野中さん

「対話に参加させてもらって、自分たちがいかに視覚でしか情報を取っていないかということにハッとさせられた。目の見える方にも、いろいろさりながら情報をキャッチしてもらえらる仕組みになるといいなと思った」

安川さん

※ 「しが盲ろう者友の会の人たちと楽しむ鑑賞会」で鑑賞した作品

アンケート結果

プロジェクトメンバー
回答者：3人(盲ろう者)

質問1：このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか？

はい 100%

質問2：このプロジェクトに参加してよかったことはありますか？
(複数回答有)

選択肢	回答者数
新しい体験ができた	3
いろんな人たちと出会えた	3
作品をさわって、話しながら楽しむことができた	3
他の人の考えを知ることができた	3
話し合いの場に参加できた	3
自分の考えを話すことができた	2
自分が提案したことが形になった	2
その他	0

鑑賞会参加者
回答者：4人

質問1：鑑賞会は、しが盲ろう者友の会のメンバーと一緒に楽しめましたか？

はい 100%

質問2：鑑賞会でよかったことはありますか？(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろんな感じ方に出会えた	3
作品をさわって、対話しながら鑑賞できた	2
「みんなの“鑑賞”」について知ることができた	2
岡田昌也さん・岡本克司さん・北川雅貴さんが作品をどう感じ取ったか知ることができた	1
〇〇さんと話げできた ・岡本さん、宮沢さん(一般参加者)	1
その他 ・初めて参加させてもらい、自分の考えや思いが広がった気がします	2

質問3：しが盲ろう者友の会のメンバーと作品を鑑賞した感想を教えてください。(複数回答有)

選択肢	回答者数
もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい	3
今後、活かせそうな気づきがあった	3
充実した作品鑑賞ができた	2
こういう捉え方があるのかと思った	2
お互いの感じ方を共有できた	2
自分だったら作品をどう捉えるか考えさせられた	0
その他 ・単純に楽しかったです	1

質問4：アートを通じて、障害のある人やマイノリティの立場にある人とともに生きやすい社会を作ろうとする考え方があります。この考え方に可能性を感じますか？

はい 66.7% 無回答 33.3%

静かな夜に、言葉を浮かべる

山田創 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA学芸員

盲ろう者は他者と触れ合っていない状態では、完全な“静かな夜”の世界にいる。しかし、そこにコミュニケーションが始まれば、“窓”が開かれ、現実世界と接続する。

福島智『渡辺荘の宇宙人 指点字で交信する日々』1995年、素朴社 68p

盲ろう者との美術鑑賞の試みとして作品をさわりながら、対話するという方法を実践しました。触手話を介して意思疎通することの難しさなどありましたが、次第にコミュニケーションにも慣れはじめ、会話が弾みはじめると、やがて作品とは全然関係のない方向に話が進んでいきました。

たとえば、海を連想させる作品を対象に鑑賞したとき、参加して下さったしが盲ろう者友の会理事長で、自身も全盲ろうの岡田さんはかつてイカ釣りに行ったときの話をしてくださいました。あるいは、ふとしたことから、死生観のやりとりをしたことも印象的です。筆者が「この作品を見ると昔に返りたくなる」と伝えると、岡田さんは「でも、人間は死に向かっていて、戻ることはない」という言葉を返してくださいました。

機微ある会話が生まれ、一定の手ごたえを感じつつも、話題がどんどん作品から乖離していったことに担当者として釈然としない思いもしていました。こうした結果を持ち帰り、上司の田端一恵さんに「有意義なコミュニケーションができた一方で、作品の伝達が不十分なのが課題に感じます」と報告すると「それでいいんじゃない?」と言われました。この一言が大きかったです。「同じ理解度をもって捉えていただきたい、という考え方自体がこちらのスタンダードの押し付けではないか」ということも併せて話していたように記憶しています。

学芸員としては、美術作品にまつわる情報は、すべての人に開かれているべきであると考えます。一部の人に占有されるものであってはならないと。それゆえに、その背景や制作意図が適切に伝えられな

い、ということは承服できないように思われるのです。しかしながら、盲ろう者と健常者の知覚のあり方は違うのであり、その知覚方法の差異にもリスペクトは払われるべきということに、このとき、ようやく気づきました。

対話録を記録したボードを見て、しが盲ろう者友の会の野中美智子さんが「盲ろうの人の頭の中をのぞいているようだ」との感想を仰いました。対話内容を記録として具現化するというプロセスを経ていったことは、確かに、なかなか開かれることのない盲ろう者の知覚世界を形にする試みとなったと感じます。そこに作品があったことが重要です。作品を挟んで対話することで関係がほぐされ、対話が豊かなものになったと感じます。おそらく、こうした「ほぐす」力がアートの力の一つのなのではないでしょうか。

全盲ろうの研究者である福島智さんは、盲ろう者の知覚世界を「静かな夜」にたとえています。この言葉を受けて、わたしは盲ろう者に話しかけることは、闇夜に言葉を浮かべるようなものではないかと想像します。

今回は、まったく異なるような知覚世界にいる相手と、アートを通じたコミュニケーションを編むことができたのではないかと思います。しかし、まだ一歩目です。あるとき、岡田さんは「盲ろう者も同じ人間として情報を交換したい」と仰いました。その言葉が刺さります。

当然のことのように見えて実はとても難しい平等な情報交換——ですから、これからも静かな夜に言葉を浮かべ、こちらに向けて届く声を受け取り、互いに世界を交換し続けることを望みます。

地域とアートの ニューノーマル

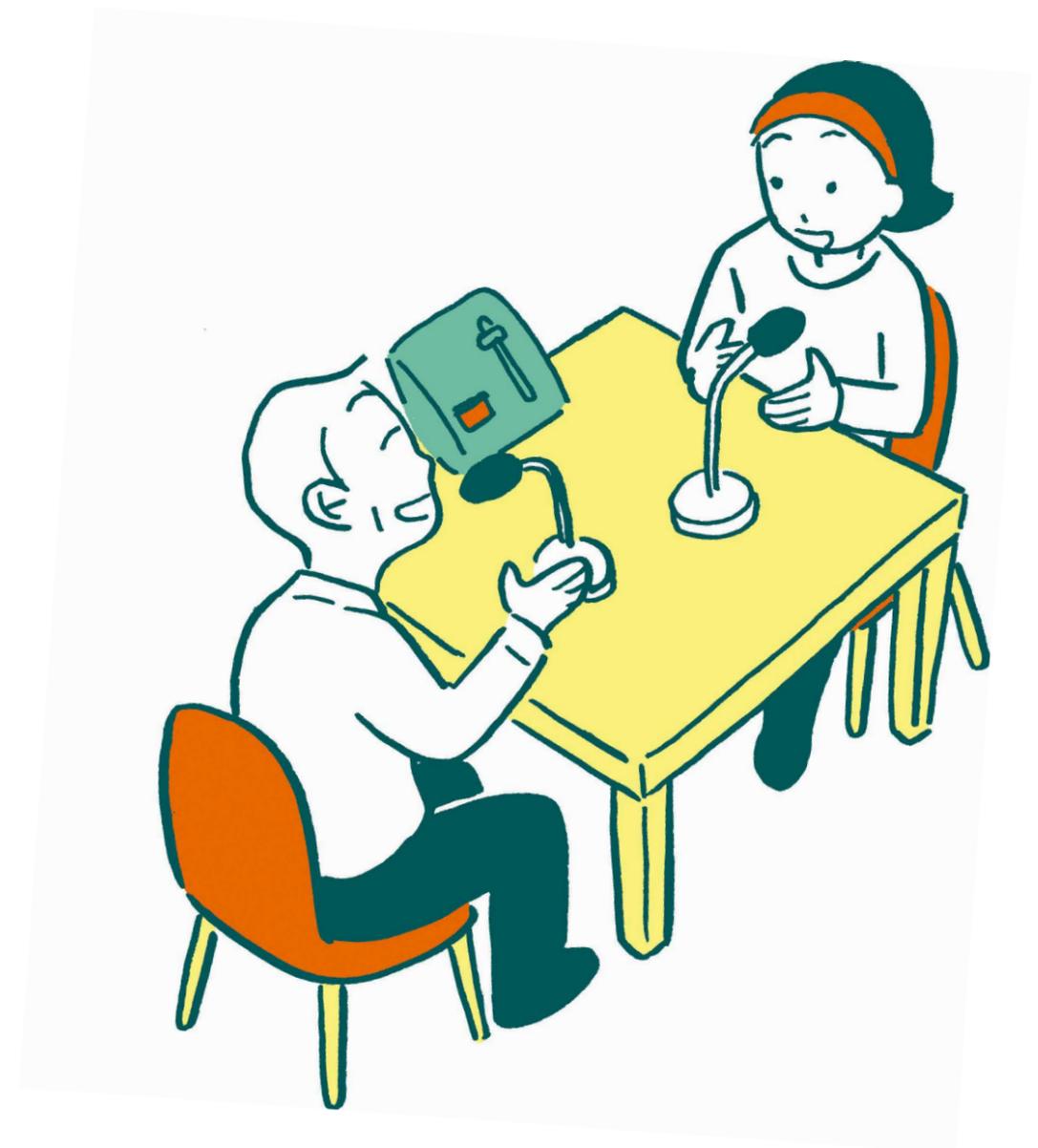
NO-MAご近所、動画なRADIO放送局

おいでよ近江八幡!ガイドは、NO-MAのご近所さん。

コロナ禍以降、わたしたちの暮らしは変化しました。

対面はオンラインに置き換わり、集いは避けられるようになりました。

変化にさらされる地域の暮らしやつながりを、今一度見つめなおすため、
この町の人たちの言葉を紡いでいきました。



NO-MAのご近所さんとつくる、 この町のアートプログラム

コミュニケーションの形が変わりゆくとしても、この地域にあるつながりを守り、ここに住む人たちの考えや言葉を、ニューノーマル時代につないでいくため、「NO-MAご近所、動画なRADIO放送局」と「おいでよ近江八幡!ガイドは、NO-MAのご近所さん。」の2つプログラムを実施しました。



“NO-MAご近所、動画なRADIO放送局”のラジобース風スタジオを外から見た写真



スタジオの中。もとは靴屋さんだった空き家に仮設したブース。



“おいでよ近江八幡!ガイドは、NO-MAのご近所さん。”で歩いた町並み

“NO-MAご近所、 動画なRADIO放送局”とは

近江八幡の旧市街地にラジオブース風スタジオが登場。
この町ならではのトークをお届けしました。

近江八幡の古い町屋が軒を連ねる旧市街地に、「NO-MAご近所、動画なRADIO放送局」が誕生しました。元々は靴屋さんだったという旧増田邸に、地域のラジオブース風スタジオを特設。ゲストは、NO-MAのご近所さんたちをはじめとする地域の方々でした。近江八幡で長く暮らす方々だからこそわかる地域の素敵なお話や、町づくりに関わる人たちとのディスカッション、また障害×地域×アートに関わるプログラムをお届けしました。ラジオと銘打ちつつ、発信はYouTubeを活用しているので、パソコンやスマホなどで現在もご覧いただけます。

NO-MAご近所、動画なRADIO放送リスト

ぐるりの人たちRADIO

ご近所さんが、主役のトークプログラムです。

第1回 小島加奈子さん・石居佐代子さん

NO-MAのサポーターやイベントに参加いただいているお二人に、NO-MAを通じて感じることや、近江八幡で行われている様々な活動をお話いただきました



第2回 前田達慶さん(言語聴覚士)

杉之原千里さん(みいちゃんのお菓子工房オーナー)

近江八幡在住のお二人ですが、ご自身の経験を活かし、様々な人が自分らしく生きる居場所づくりのサポートを行っています。



第3回 大野宏さん(Studio on_site)

大野さんは、その土地の自然がもつ材料を活用し、人と場のつながりを生む、建築や家具などを制作しています。



第4回 久木茂さん(レイカ34会)・川村嘉男さん

レイカ34会は、「滋賀県レイカディア大学」(シニア世代の学びの場)の34期生のメンバーが立ち上げたグループで、卒業した今も続いています。



第5回 門脇真斗さん・麻生知宏さん(フリースクールSince)

Sinceは、滋賀大学教育学部出身の麻生さん、門脇さん、生鷹幹太さんの3人が立ち上げた、不登校など生きづらさを感じる子どもたちの居場所です。



第6回 藤田昌喜さん(近江家具商人 代表)

藤田さんは、オーダーメイドの家具などを製作しながら、近江八幡市旧市街の一角で、家具と生活道具を揃えたショップ「HOME PICNIC STOREHOUSE」を運営されています。



第7回 田口真太郎さん(成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教)

長年、近江八幡の町おこしに携わってきた田口さんならではの、知られざる町の歴史や穴場スポットが詰まった町歩きの様子をお楽しみください。



第8回 杉田信也さん(近江兄弟社高等学校 教諭)

“本物の出会い”をキーワードに、学生と共に地域へ足を運び、本物と出会う体験授業が行われています。



第9回 久木富久子さん(びわこ学園 えがお 支援員)

重症心身障害のある方の支援を行う中で、コミュニケーションとして行う触れ合いから感情を感じとり、作品につなげる創作活動が行われています。



第10回 塚本千翔さん(沖島民泊湖心(ここ) 管理、漁師見習い)

塚本さんが暮らす沖島は、日本で唯一、淡水湖に浮かぶ島で人が住んでいる島です。約250人いる島民の主なお仕事は漁業。塚本さんも民泊を管理しながら、漁師の見習いとしてほぼ毎日漁に出ます。



第11回 大山真さん(デザイナー)

大山さんは幅広い領域のデザインを手掛けるかたわら、「北之庄菜」を地域のブランド野菜にしようというプロジェクトのリーダーもされています。



第12回 森嶋利成さん(森島商事株式会社・近江牛毛利志満 営業部長)

いわずと知れた近江八幡の代表名物である「近江牛」。そのルーツを、滋賀における食文化、歴史を絡めてお話いただきました。また、森嶋さんはアール・ブリュット(生の芸術)の愛好家としての顔も持ちます。



第13回 宮村利典さん(まちや倶楽部 代表・株式会社 Wallaby 代表取締役)

古い酒蔵を改装した複合施設“まちや倶楽部”を運営する宮村さん。「おいでよ近江八幡!ガイドは、NO-MAのご近所さん。」ではガイドとして、あきんど商店街で代々続く商店を中心にご案内いただいた、まち歩きの様子を振り返ります。



ははー、なるほどRADIO

ぜひご近所さんに聞いてもらいたい!障害×アートに関する学びのプログラムです。

第1回 野原健司さん(アーティスト)、

森美菜子さん・外山聖さん(障害者支援事業所いきいき)

3人は、「みんなの“鑑賞”1」のメンバーです。障害のあるなしに関わらず、誰もがアートを楽しめるような、美術鑑賞の方法を考えていきました。 →内容の要約はp14へ



第2回 八幡亜樹さん(アーティスト)

本プロジェクトと同時に開催したNO-MA企画展「79億の他人」の出展者の八幡さんは、映像インスタレーションを、「『人類の表現=生きること』のための思考装置」と捉え、取材をベースとした作品を制作しています。



第3回 水上明彦さん(さふらん生活園 施設長)

さふらん生活園は、企画展「79億の他人」に出展していた藤本正人さんが通う生活介護施設です。現在、34名が通い、ものづくりやお菓子づくりにより利用者の経済的自立を目指す一方、利用者の表現活動を公募展に応募するなど、制作活動の発表にも力を入れています。



第4回 ジェイド・フレンチ(リーズ大学美術・美術史・文化研究学部客員研究員)

長年研究されている「インクルーシブ・キュレーション」という実践について。この実践は、学習障害のある人とともに展覧会を企画するというもので、そのことを通じて、インクルーシブな参画のあり方や社会との接点を探っていくというものです。



第5回

前半：野中美智子さん(しが盲ろう者友の会 事務局)、

安川雄基さん(アトリエカフェ代表)

後半：岡田昌也さん(しが盲ろう者友の会 理事長)

「みんなの“鑑賞”2」のプロジェクトメンバーです。前半は、盲ろう者の支援に携わる野中さんと什器作成を担当した安川さんに、後半には盲ろうの当事者である岡田さんに、それぞれお話を聞いています。 →内容の要約はp26へ



前半



後半

PICK UP REPORT 1

おもてなしの心があれば、気持ちのよいあいさつが自然に生まれる



小島 加奈子(左) Kojima Kanako

石居 佐代子(右) Ishii Sayoko

気遣い上手で謙虚な石居さん。いつも場をホッと和ませてくれます。NO-MAが企画するイベントや、地域の催しにも積極的に参加されるなど活動的で、マイブームは俳句です。小島さんは地域の観光ガイドや芸術祭に関わるなどアグレッシブに活動しています。近年は、紙芝居を通じて地域文化の魅力を伝えるため尽力しています。



「ランチと芸術鑑賞会」の様子

“ぐるりの人たちRADIO”の記念すべき1回目のゲストは、石居佐代子さんと小島加奈子さんです。長年、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAのボランティアに参加いただいているお二人に、近江八幡での様々な活動についてお話しいただきました。

——石居さんは、NO-MAの関連イベントにも、よく参加してくださいませ。印象に残っているイベントはありますか？

石居：2020年11月に参加した、盲ろうの人や視覚障害の人と楽しむ「ランチと芸術鑑賞会」というイベントが印象的でした。視覚障害の人と一緒に近隣の食堂でお昼ごはんを食べて、その後、町並みをぶらりと散策しながら、NO-MAまで行き、アートの言葉にしにくい部分を味わうイベントでした。

——実際に参加してみていかがでしたか？

石居：経験したことのないイベントでしたので、最初は少し緊張しました。でも、お昼を一緒に「おいしい、おいしい」って言いながら食べて、同じ時間を和気あいあいと過ごすなかで、すごく楽しくなっていました。一方で、日常で人と触れ合う上で、見過ごしがちな気配りの大切さとか、自分の対応というのを見直す機会にもなりました。

——小島さんは、事前にお話しを聞いて驚いたんですけど、様々な活動をされているんですね。まずは最近、取り組んでいることについて教えてくださいませ。

小島：近江八幡観光ボランティアガイド協会に入

り、観光に来られる方の案内などをして8年程度経ちます。また、この活動の一環で、地域に伝わる昔話の紙芝居を上演する企画を行っています。これまで、「秀次さんと近江八幡」や「白鷺の恩返し」などをお客様から依頼されたときや催しがあるときなどに実演してきました。今は、グループで新しい紙芝居も作っています。中之庄という地域に伝わる話を紙芝居にしている、内容はまだ内緒ですが、完成次第ご披露することを考えています。コロナ禍の前までは、月に1、2回、あちこち出かけて紙芝居をしていました。お話しをして、皆さんの喜ぶ顔が見られるのが何よりもうれしいです。

——人と関わるなかで小島さんが大切にされていることは何でしょう。

小島：「おもてなしの心」。それがあれば、気配り、笑顔、気持ちのよいあいさつが自然に生まれ、場が和みますね。観光の方だとバスの長旅で体調は大丈夫かな、しんどくないかなと、顔色をちらっと見て、観光コースを考えます。目一杯、近江八幡を楽しんでほしいじゃないですか。そのためにも、状況に合わせて柔軟に対応する「おもてなしの心」が大切だと思っています。人との関わりが私の大きなモチベーションです。NO-MAの企画もね、この間、ご近所さんにも、声を掛けさせていただいたんですよ。一人ひとりがそうして関わり合うことで輪が広まるのだと思っています。

PICK UP REPORT 2

言葉だけではない、
コミュニケーションを感じ取る

さふらん生活園 施設長

水上 明彦 Mizukami Akihiko

企画展「79億の他人」に出展した藤本正人さんが通う生活介護施設さふらん生活園(愛知県名古屋市)の施設長。現在、34名が通い、ものづくりやお菓子作りにより利用者の経済的自立を目指す一方、利用者の表現活動を公募展に応募するなど、制作活動の発表にも力を入れています。

カセットテープの真ん中に輪ゴムを留めて、それをひもで吊るしてぶらさげる。バランスが取れてくると回るカセットテープを、じっと見つめるのが藤本正人さんです。一日の大半をこの行為に費やし、それが40年続けられています。藤本さんが通う生活介護施設さふらん学園の施設長・水上明彦さんに表現の背景を聞きました。

——藤本さんの行為は作品とっていいのでしょうか？

藤本さんが何をしたいのか、本当のところはわからないんです。藤本さんにとって気持ちよく回るポイントがあるんでしょうね。カセットテープ、ひも、ゴムを分解するのも藤本さんの行為の特徴です。自分で元の形に戻すのではなく、誰かに手渡して直すように頼みます。気に入らなければ、また外してやり直し。そんなことが延々と繰り返されるのですが、「たくじさん」という利用者が、根気よく付き合っています。

——藤本さんが40年その深みにいるなかで、「たくじさん」も同じ深みにいるんですね。

ポケとツッコミじゃないですけど、2人の関係が出来上がっていて、「たくじさん」にとっても、直すこだわりがあるように感じます。

——「79億の他人」^{※1}では藤本さんの映像を展示しました。ポコラート展^{※2}に出展された際に制作されたものですが、出展されたいきさつを教えてください。

ポコラート展の「かたちにならない表現部門」に応募したのですが、私たちも藤本さんの行為を「美術作品」と断言するのは、正直苦しいと思っています。ただ、藤本さんの行為は、本当に藤本さんならではのものなので、それを受け止めてくれるのはアートしかないとも思いました。

——アートを軸に視点を変えてみる発想はとてもおもしろいですね。

藤本さんに限らず、施設の中で障害のある方と接するとき、やはり言葉だけで表現されることは多いわけではありません。しかし、確実に何か伝え合うということはされているんです。そこを感じ取るのが、私たちの仕事でもあります。

——藤本さんの行為を見たとき、独特の静けさがありました。そこに「たくじさん」が来て、カセットと輪ゴムを組み直すというコミュニケーションが生まれる。この行為は言語なかもしれないと感じたのを覚えています。

アウトプットの方法がちょっと違うだけで、似たようなコミュニケーションは福祉の現場ではどこでも起こっていることだと思います。うまく伝わらず、割り切ったり、諦めてしまうこともあると思うのですが、悩みながらも、コミュニケーションの方法を見つけていくというのは、楽しみでもありますね。

※1 企画展「79億の他人——この星に住む、すべての『わたし』へ」(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、まちや倶楽部/2021年)

※2 「ポコラート全国公募展 vol.9」(アーツ千代田3331/2020年)



「Negative capability — つらいでいられる能力 —」2019より

©「ポコラート全国公募展 vol.9」 主催：千代田区、アーツ千代田3331

PICK UP REPORT 3

誰もが「自分を好き」と
言える場所をつくる

フリースクール Since

門脇 真斗 (左) Kadowaki Manato

麻生 知宏 (右) Aso Tomohiro

滋賀大学教育学部在学時、同じ学部の麻生さん、門脇さん、生鷹幹太さんの3人で、不登校の子供たちに家でも学校でもない居場所をつくろうと、フリースクール Since を立ち上げ、卒業後の現在も活動中。生きづらさを感じる子供たちに、近江八幡、滋賀県内で居場所をつくる活動を行っています。

学生時代にフリースクール Since を立ち上げた麻生知宏さん、門脇真斗さんが、生きづらさを抱える子供たちの現状を伝えてくれました。子供たちが、自分自身のことを好きだと胸を張って言える社会を作るために、近江八幡市を中心に活動されています。

——フリースクール Since の具体的な活動を教えてください。

麻生：Since の活動としては、大きく2つに分かれます。1つはフリースクール、もう一つがステップブラザーという訪問型の支援です。フリースクールは、平日の10時から16時まで、不登校や学校に行きづらいている子供たちが集まって一緒に過ごしています。午前は、体験学習といっているいろんな好きに合う場を設け、運動や料理を一緒に行います。午後は、本人が本当にしたいことをする自由時間。大体、週3回行っています。ステップブラザーは、週1回から2回、フリースクールのような場所にも来られない子供たちが対象です。勉強の遅れをサポートする「勉強コース」と、遊びなどを通して外へ出るきっかけをサポートする「交流コース」の2つがあります。

——最初からその2種類をやろうと考えて、活動を始められたのですか？

門脇：フリースクールをつくりたいという思いで始めたのですが、活動していくなかで学校というハードルがすごく高くて、フリースクールというだけでも、十分ハードルが高いと気が付きました。その前段



階で何かできるのではと考えて、今の2つの支援になりました。

——それだけ居場所を必要としている子供が多いのですね。

麻生：不登校のなかでもまだまだ自分たちが気づいていない層が多いように感じています。フリースクール自体認知度が低くて、このような場での広報も行っていますが、業界を知っていただくことが一番の課題だと感じています。

——コロナ後に活動を始めたということですが Since の目指すところは？

門脇：コロナ以降、オンライン授業の流れが出てきて、学校というものの価値も見直されているように思います。オンライン授業でもいいんじゃないかという声も聞きますが、やはり人と人の繋がりや結びつきも意識して伝えていきたいです。

麻生：学校外の第3の居場所は、今後も絶対必要だと思います。学校に行っていない僕と、学校はしんどいけど行かないといけないと思っていた門脇、学校は楽しいからみんな行けばいいのと思っていた生鷹。そんな3人だからこそ、いろんな層の子供に寄り添って、いろんな人が繋がるフリースクールが作っていけるのではないかと考えています。

PICK UP REPORT 4

ピクニックに行くような
楽しい気持ちを起こせる空間づくり

近江家具商人 代表

藤田 昌喜 Fujita Masaki

2008年より近江家具商人として活動を開始。オーダーメイドの家具などを製作しながら、2020年に近江八幡市旧市街の一角で、家具と生活道具を揃えたショップ「HOMEPICNIC STOREHOUSE」をオープン。住宅や店舗の家具設計制作、プロダクト、現代美術作家やギャラリーの展示、制作協力等、幅広い活動を行っています。

学生のころから家具を作ったり、アーティストの展示什器製作などを行ってきた藤田さんは、家具づくりにとどまらず、多種多様なものづくりを続けています。

経営されているお店「HOMEPICNIC STOREHOUSE」では、ていねいにつくり上げられた道具のある暮らしの提案をされています。

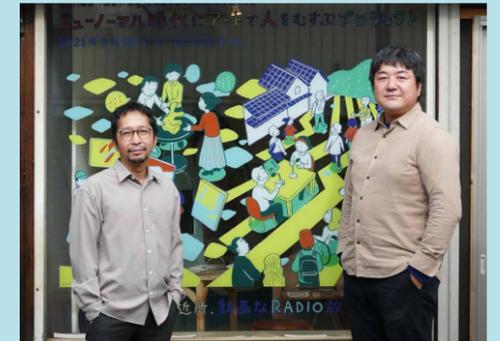
——近江家具商人の具体的な活動を教えてください。

近江八幡市旧市街・永原町で、「HOMEPICNIC STOREHOUSE (ホームピクニックストアハウス)」という家具と生活道具を揃えているお店を営んでいます。普段、週4日はオーダーメイドの家具製作、週1日は大学で授業を行い、土日でお店をしています。

大学のころから、自主製作で家具をつくったり、アーティストの展示什器製作などを行ったりしていて、卒業後の今も続いている感じです。その他にも、Tシャツのデザインや名刺のデザインなど、できる範囲でなんでもやらせていただいています。

——店名に「ホーム」と「ハウス」という似たような2つのワードが含まれていますが、どういう意図からそのような店名をつけられたのですか？

もともと、「ホームピクニック」というブランドを定番で立ち上げていたのですが、ニュアンス的には、お家の中でピクニックに行くような楽しい気持ちを起こせる空間を提供できればと思い、名付けまし



た。箱としての家と家庭の両方が入っていて、そこが両方楽しい空間になるようなイメージです。

——オーダーメイド家具を製作されていますが、どのようなことを大切にされているのでしょうか？

普通は、家を建てる方が建築事務所をお願いして、そこから家具屋さんに行くパターンが多いんですよね。お客様から直接僕たちにつなぐ接点がない。そこで重要になってくるのが「HOMEPICNIC STOREHOUSE」のようなお店なんです。オーダーメイド家具の場合は、お客様と話し、素材やサイズ感など希望に応じてデザインしていきます。すべての要素を大事にして、満足してもらえるものを提案します。

——藤田さんの活動で、コロナ禍による影響はありますか？

直接仕事に影響を与えていることとしては、展示会がすごく減ったことで、展示台製作や額縁をつくるような仕事は少なくなりました。その代わりに家の方に手を入れるみたいなお客様が増えました。仕事の中身は移り変わっていますが、つくっている人間としては変わったという意識はないくらい、今でも同じ時間が流れています。ものをつくることを通して、人といろんなつながり方ができる時代でもあるので、今の状況を悲観的に捉えず、工夫しながらつながりを生み出していきたいと考えています。

“おいでよ近江八幡!ガイドは、NO-MAのご近所さん。”とは



近江八幡をよく知るご近所さんにガイドになっていただき、NO-MAや八幡堀周辺、近江八幡の旧市街商店街、田園風景が広がる北之庄などをめぐりました。いつもの旅とはちょっと違う、「ならでは」を味わうことができた町歩きツアーとなりました。

第1回 田口真太郎さんとめぐる、町歩きツアー

(成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 研究員 助教)

長年、近江八幡の町づくりに携わってきた田口さんが、NO-MAから日牟禮八幡宮までの旧市街をのんびり散策しながら、知られざる町の歴史やパワースポットなどを紹介してくれました。



①朝鮮通信使が歩いた旧朝鮮人街道。



②古い町屋の壁に使われている船底板。



③地元住民の力でよみがえった八幡堀。



④井上靖の『星と祭』にも登場する円満寺。



⑤日牟禮八幡宮本殿の裏に回ると、そこは知る人の少ないパワースポット。

第2回 宮村利典さんとめぐる、町歩きツアー

(まちや倶楽部 代表・株式会社 Wallaby 代表取締役)

企画展「79億の他人」の会場でもあるまちや倶楽部のオーナー宮村利典さんが、江戸時代からの商いの歴史が色濃く残る「あきんど道商店街」を案内してくれました。古い街並みにヴォーリズ建築が溶け込んでいるのも近江八幡の魅力です。



①金物屋さんの丸重商店のななめ前には、昔は聾話学校の元となる研究所がありました。



②スマリ文具店は昔は炭を焼いていたそうです。



③江戸時代から続く中島多吉商店は最も古くから残るお店。



④旧近江兄弟社の地塩寮はヴォーリズ氏によって建てられました。



⑤まちや倶楽部は新しいお店も増えて、観光客でにぎわっています。

第3回 大山真さんとめぐる、町歩きツアー

(デザイナー)

幅広くデザインを手掛ける大山真さんに豊かな自然が広がる「北之庄」をご案内いただきました。「タバコ屋さんのマッチ箱に残っていた」という種から「北之庄菜」を復活させ、地域のブランド野菜として次世代につなぐ活動をしています。



①北之庄に到着。大自然のど真ん中から散策がはじまりました。



②水郷めぐりをする手漕ぎの屋形船がのどかに行き交います。



③大山さんが管理する北之庄菜畑に到着。



④15cm間隔で大きく育てたいので、小さな株を間引きします。



⑤間引きとはいえ十分食べられる大きさ!参加者がおみやげとしていただきました。

“地域とアートのニューノーマル” を振り返る

地域の人たちが出演するトーク企画のナビゲーターや、まち歩きガイドなどを務めた田口真太郎さんと一緒に、プロジェクトの成果や地域が抱える社会課題などについて話し合いました。

田口真太郎（成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 助教）

2013年、近江八幡市地域おこし協力隊を経て、まちづくり会社(株)まっせのマネージャーとして設立時から活動。大学や専門家と地域と連携し、伝統文化の研究からセミナーやワークショップを通じた人材育成など、コミュニケーションプログラムの設計から運営を行なっている。現在は、成安造形大学 未来社会デザイン共創機構 研究員、滋賀県立大学 非常勤講師、滋賀県社会教育委員なども務める。

横井悠

社会福祉法人グロー芸術文化部／ボーダレス・アートミュージアム NO-MA主任学芸員。地域とアートのニューノーマルを担当する。

山田創

社会福祉法人グロー芸術文化部／ボーダレス・アートミュージアム NO-MA学芸員。本プロジェクトの全体を担当する。

横井

コロナ禍により地域の関係性が希薄となっている中で、つながりを守っていこうとして始めたのがこのプロジェクトでしたが、実際に始める前と、実施後の今は、どのような感想を持つでしょうか。

田口

計画段階のときのことを振り返ると、改めてロジックモデルが練られていると思いました。しかし、スタート時点ではイメージを持ちづらかったのが、探りながら取り組んでいきました。トークのナビゲーターを1回、2回と重ねるにつれて、長期的なアウトカムが明確化していき、どんどん面白くなっていったという印象です。

山田

長期的なアウトカムは、今回のプロジェクトでいうと、豊かな地域社会をつくることに帰結していくと思うのですが、地域の中での豊かさというのは、具体的にはどのようなものといえるのでしょうか。

田口

この2年間、外出が制限され、多くの事業が停滞しました。日常のコミュニケーションも、SNSなどではあっても、直接、場に集まって話し合うというのは、明確な理由が必要になったと思います。そして、2年間滞ると、集まる理由付け自体が難しくなります。地域のつながりは、収益を産まず、また合理的ではないことも多い。例えば、地藏盆などの行事は、見送られたし、地域によってはなくなったところもあります。また、自治会や町内会についても、以前は役員が全員集まっていたけど、簡略化して会長一人でもできてしまったので、こうしたスキームでもよいのではという見方も広がっています。理由なく集まって、みんな顔合わせることで、自然と形作られていたよい地域性は、理由付けができないことで、保てない状況となっています。

山田

全部ではないのですが、理由なき集まりの減少は、率直に言って、ちょっと助かると思うこともあります。とはいえ今のお話を聞いて、つながりが希薄になる社会像が見えてきました。理由なき集まりが少ないということは、特に意識せずとも得ることができていたコミュニケーションが減少しているといえるのではないのでしょうか。

田口

30から40代の子育て世帯などは助かることが多いというのはあります。ただ、こうした合理的な仕組みは、10年後とか長期的に見ると後悔することになりそうだと懸念しています。例えば災害など、予期せ

ぬ異常事態が起こったときにいろいろな問題が浮かび上がるでしょう。高齢者の対応やプライバシー確保など深刻な諸問題に対して、今、検討、準備する必要があるけれど、合理的な理由を付けなければ、防災会議すらできない。こうした危機感は行政の人も感じていて、相談も受けています。

横井

滅多に起こらない事態に対しては、危機感が抱けず、意識も高まらない。普段から声をかけ合う習慣があり、近隣の人たちがそれぞれ身近な人たちのことを把握できているなど、有機的な関係を持っていたら、意識が上向き、異常事態が起こったときも助け合えるかもしれません。地域の多様な人たちに出演いただいた今回のプロジェクトでは、その人からにじみ出るものを引き出すことを心がけて、ファシリテートしていきました。この試み自体が、まさかお話しにあったような社会課題とも絡んでいるとは、思いもよりませんでした。ただ、世代間を超えて、ともに認識を高めていくのは、とても難しいことのように思います。

田口

つながり方をアップデートする必要があると明確に思います。これまで行政、商工会議所、観光協会などがまちづくりについて検討してきましたが、その官民連携をアップデートしなければならないと。また具体的には、コレクティブインパクトが必要だと考えています。多様な分野の関係者が集っても、規模や予算が異なり、共通のアジェンダが立てにくい。そのため、社会課題解決に向けて感覚的に取り組んできたのではないのでしょうか。地域運営や地域経営を、感覚的ではなく、手法化させてまずはつながり方から見直すべきです。今回の取り組みは、すでに関係ができている人に、定例的に声かけたというより、初めて出会う人も含め、広い視野で声かけしたので、俯瞰して見ると、多様性がある取り組みになりました。個人としての意識が変わらないといけないと思うので、今回はそれを試みる一つの機会だったと感じています。

山田

コレクティブインパクトというと、いろんなプレイヤーが共同しているイメージですが、仮に、課題である近江八幡という地域社会でつながり

の希薄化を課題に設定すると、どのようなつながり方になるのでしょうか。

田口

前提として、運営主体となる事務局が、このプロジェクトに集中して取り組めることが大事です。その上で、「ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト」で言えば、地域密着型のまったく新しい形で続けていくことを期待しています。今回出演された、久木茂さんや川村嘉男さんは、8年前、この町でアートに触れて、関わりが深まりました。本当によい例だと思います。これからもボランティアに参加して、ラジオに出演して、いろんなアプローチからつながっていったらよいと思います。

横井

企画内容は年々更新していますが、久木さんや川村さんとは、地域を軸にクリエイティビティを作っていく企画に取り組み出した、初期のころに出会いましたね。お二人のように、今では心強い存在の方々がたくさんいらっしゃいます。

山田

唐突ですが、「お祭り」なんじゃないかなと。2013年に企画を始めて以降、毎年、福祉とアートをつなぐ、いわばお祭りともいえるものを実施しています。田口さんともその中で関わることになりました。お祭りのような行事もなくなっていることを思えば、お祭りのようなものが普段結ばれない人たちを結ぶのかなと思います。

田口

毎年やっていたから今回の出演にもつながったので、今後もこのような企画を続けてほしいです。そして手法というのを意識した方がいい。アートと福祉の祭りとして、確実に地域を耕していますし、長期的なアウトカムも明確化してきています。クリエイティブなことに挑戦している祭りは、人が集まりますし、何より楽しいので、ぜひ手法化して、世の中に広げてほしいと思います。

量的成果

- ・ 地域の人たちが出演するトーク企画の実施回数、出演者数：13回、17名
- ・ 学びとなるトーク企画の実施回数、出演者数：5回、9名
- ・ 町歩き企画の実施回数、出演者数：3回、3名
- ・ 本事業で共働した団体：14団体
- ・ 本事業で共働した高齢者：18人
- ・ 地域（近江八幡）や人（トーク企画出演者など）とつながりが持てたと答えた参加（視聴）者：81.3%
- ・ 学びや新たな発見になったと答えた参加（視聴）者：93.8%

出会いと発見、ふれあいから 深まる近江八幡への親しみ

～3回の町歩きイベントに参加して～

赤澤 誉四郎 社会福祉法人グロー芸術文化部 自立生活支援員



近江八幡の旧市街地を歩いていると、古い建物や町名の由来が書かれた案内看板が、そこかしこに建てられています。少しの時間足を止めるだけで、町に関する知識が増えて、近江八幡のことが少し好きになったような気持ちになります。豊臣秀次によって城下町が拓かれてから400数年。土地の人たちで守られてきた伝承や風習が、今でも歴史として語り継がれています。

人との出会いも、町を知るうえで大きな要素となります。コロナ禍で人と接する機会が極端に減ってしまったのですが、出会いの機会を創出しようと、3回の町歩きを計画しました。ガイドは、町おこしに長年携わってきた田口真太郎さん、旧市街地で複合施設を運営する宮村利典さん、デザイナーの大山真さん。町の歴史に触れながら散策したり、商店街の店主の話の聞いたり、地元野菜の農作業を手伝ったりと、バラエティに富んだ内容でした。

黒い外壁を指さして「滋賀県でよく見られる、船底板を使った外壁です。雨水に強い特性を生かしています」と田口さんが紹介すると、江戸時代に琵琶湖を往来した大型船の様子が目に浮かびます。いつもなら通り過ぎてしまう景色も、知識が1つ増えたことで、誰かに伝えたいくなりました。



宮村さんが案内してくれた文房具店は、昔は墨の卸売りをしていたそうで、「スミ利」という店名に当時の面影が残っています。デパートでも見られないという「万年筆の品揃えが自慢です」と語る店主からは、長年、店を守ってきた誇りが感じられました。



大山さんの町歩きは、長靴と軍手に装いを整えて、北之庄の畑の真ん中からスタートしました。のんびりと水郷をゆく舟を見ながら、のどかな田園風景を歩いていきます。目的地の畑では、伝統野菜である北之庄菜の間引きを体験しました。「昭和30年ごろまで栽培されて途絶えていたのですが、タバコ屋さんのマッチ箱のなかに種が残っていてよみがえったんです。カブと大根の間ぐらいの味ですよ」と大山さん。参加者の皆さんは、間引いた北之庄菜を持ち帰り、鍋に入れたり、漬物にして味わったそうです。

“動画なラジオ放送局”に登場した宮村さんは、「ニューノーマル時代にできることはなにか」と聞かれて、次のように答えました。「コロナ禍で、近江八幡の魅力ってなんだろうと考えることが増えました。単純に競争して高価なもの、いいものを提供すればお客さんが来てくれるわけではありません。近江八幡には古い建物など魅力がたくさんあるので、そこを知ってほしいですね」

コロナをきっかけにオンラインでの交流機会が増え、ネット情報が充実してきてはいるのですが、実際にガイドの人の思いを聞き町を歩くことで、発見や気づきの多いイベントになりました。ふれあいを通じてまた少し近江八幡への親しみが増したような気がします。



障害と地域とアートのニューノーマルを伝える

ホームページの設置



このプロジェクトを伝えるため、デジタル/アナログの媒体を通じて、全国/地域の人々に発信していきました。

リーフレットの配布とブックレットの発行



ニューノーマル時代における、「誰一人取り残さない」ための情報発信とは？

赤澤 誉四郎 社会福祉法人グロー芸術文化部 自立生活支援員

アートで人をむすぶプロジェクトの特設ウェブサイト
を立ち上げたとき、コロナ禍における情報発信のあり方が、大きなテーマとなりました。スマートフォンの普及率が8割を超える現代ですが、誰もがネットから簡単に情報を手に入れているわけではありません。スマートフォンを持たない2割の人はもちろん、インターネットの操作が苦手な人も多くいます。町を歩けばチラシが置かれていたり、ポスターが貼られていたり、情報に出会う機会はたくさんあります。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、外出の機会が減りました。人と接する機会も減って、人づてに伝わる情報も極端に減っていることでしょう。情報が得られないことで、孤独を感じていた人もいます。

新しい生活スタイルがだんだんと当たり前になっていくなかで、どうしたら誰一人取り残すことなく情報を届けることができるのか。アナログな方法ですが、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAと関わりがある人には、一人ひとりにリーフレットを郵送で届けました。自治会の回覧板は、有力な情報ツールになりました。

プロジェクトに親しみを感じてもらおうというところで、大きな力を発揮したのが漫画家のスケラッコさんが描いたイラストです。障害の有無に関係なくアートを楽しむ人たち、動画なラジオの収録風景や、ガイドに案内されて近江八幡の町歩きを楽しむ人も描かれています。にっこりとした表情は、「なにか楽しいことがありそう」という雰囲気を伝えていました。

このイラストをキービジュアルにして、特設ウェブサイトを訪れた人、リーフレットを手にした人が同じプロジェクトに接しているとわかるようにしました。



スケラッコさんのイラストが町に馴染む。

のちに配布されるブックレットの表紙にも、同じイラストが印刷されています。さらに、ラジオブース風スタジオとして活用した旧増田邸のショーウィンドーにも、大きなスケラッコさんのイラストがプリントされていて、道行く人の注目を集めました。

旧増田邸は、土日、祝日は出入り自由のスペースとして、地域の人たちが交流できる場を目指しました。収録した動画が自由に視聴できるパソコンが設置され、大きなモニターには字幕付きの動画を流しました。画面には、地元の人なら知っている顔が登場します。「なんだろう?」と遠巻きに見ている人がたくさんいました。家に帰ってYouTubeの配信を探すのは手間だったかもしれませんが、回覧板で届いたブックレットを見て、「ああ、あれか」と結びつき、中をめぐって「こんなことをやっていたんだ」とうなずいた人もいたはずでした。

デジタルとアナログ、どちらの情報発信が重要ということではありません。両者を結び付けるツールがぬくもりのあるイラストだったことが、ニューノーマル時代の情報発信の一つのあり方を示していたように感じます。

このプロジェクトの中にいた人たちによる振り返り



参加した人

横井悠

社会福祉法人グロー芸術文化部／ボーダレス・アートミュージアムNO-MA主任学芸員。地域とアートのニューノーマルを担当する。

山田創

社会福祉法人グロー芸術文化部／ボーダレス・アートミュージアムNO-MA学芸員。本プロジェクトの全体を担当する。

赤澤誉四郎

社会福祉法人グロー芸術文化部自立生活支援員。ホームページやニューズレター等情報発信に関する業務を担当。近年、神奈川から滋賀県に引っ越してきた。

石田瞳

社会福祉法人グロー芸術文化部自立生活支援員。本プロジェクトにおいては主に「みんなの鑑賞」を担当。普段の業務においても、芸術をきっかけに、障害のある人のアクセシビリティ（社会参加のしやすさ）という視点で支援のあり方を考える研究を担当。

コロナの影響と近江八幡

山田

集まってもらったのは、本プロジェクトに中心的に関わったスタッフです。各プロジェクトの成果やプロセスについては、報告書にまとめましたので、私も含め、実際に担当した人の目からどんなふうがこのプロジェクトが映ったかな、というのを意見交換できればよいなと思っております。

まず、1つ目の話題提供として、このプロジェクトは「コロナ禍」という、これから何が起るのかははっきりしないという状況を

前提に、事業設計されていったわけですが、この点
は実際にはどんな風にプロジェクトと絡んでいった
ような感覚を持っていますか？

横井

ぼくが担当した「地域とアートのニューノーマル」で
いうと、コロナ禍の中において、地域のつながりを
守っていくことが必要なのだろうという漠然とした
思いがありました。ですが、それが最終的にどんな
形に着地していくのかは、はじめからイメージができて
いたわけではありませんでした。

探り探りラジオの出演者を探し、町歩きイベントを
形作っていった印象です。そうして、実際に初めてい
ろいろな人たちと出会っていきます。漁師さんや、地
域で長年暮らしている方々と話ができただけですが、
こういう機会がないと改まって話すことがなかった
のではないかと思います。

さらに、話を聞いていると、地域の活動が少なくなっ
たりとか、自粛が増えたりという状況が見えてきま
した。あまり目的のないフランクなつながりみたい
なものが弱まっているように見えました。今回のプ
ロジェクトがきっかけに、そういうつながりの弱まり
を再確認することになったのではないかと思います。

山田

「コロナ禍」という極端な状況の出現により、コミュ
ニティの弱まりという地域課題が浮き彫りになり、
顕在化したという側面があるかもしれません。
この観点でいうと、赤澤さんはもともと都市部での
生活が長くて、近年、滋賀に引っ越していらっしゃ
いましたよね。その赤澤さんから見て、横井さんの話

ふくめ、この地域がどう見えますか？

赤澤

近江八幡は、若い層を多く含む移住者が駅の近く
に集中して、昔からの定住者たちが旧市街地に多く
いらっしゃいますが、この間はちょっと分かれている
ように思えます。

このプロジェクトの舞台になっているのは、NO-MA
も位置する、旧市街地エリアで、伝統の色が濃く、
昔ながらのつながりを大切にしている地域だと思
います。ご年配の方の中には、コロナ禍の影響で、
集まって活動をためらわれている方も多くいらっ
やります。一方で、若い層の人たちが、新しくこの
地域を舞台になにかしらの活動をしていたりするの
も見ました。

山田

コロナ禍を機に活動機会が少なくなっていく高齢
者層、古くからこの町にいる人たちが多く暮らすの
とともに、コロナ禍においても活動を絶やさずにし
ていこうとする流入者・若年層世代がいて、そこ
は二層化している。お二人の発言をそんな風に受
け取りました。

個人的には、この二つの層を無理に結びつける必
要はないのではないかと思います。しかし、どちらの
層にも情報を届けたいですし、あるいは相互の
交流があってもいいかもしれない。横井さんが担当
した、「地域とアートのニューノーマル」で行ったラジ
オプログラムは、このような二層構造の中で、様々
な世代にアプローチするものになったのではないか
と思います。

障害者は、地域住民でもある

山田

さて、まずは「地域」に関する話が出ましたが、この
プロジェクトは2本立てで、「障害」がもう一つの柱
となっています。「障害」に関するパートを担当し
たのは、わたしと石田さんでしたが、石田さんのお話
も聞きたいです。

石田

これまで気になっていたことがあって、それは「障害
のある人」と「地域の人」という言葉の使い分けで
す。たとえば、鑑賞会をしたときに、その対象を「障
害者」と「地域住民」に設定したこともあるのです

が、今回でいえば、参加してくださった障害のある
人も、もちろん地域の人でもあります。

山田

その話を象徴するようなエピソードがあって、ちょっと
前に近くのコンビニで、盲ろう者の方と出会ったん
です。盲ろう者の方に同行して通訳・介助をしてい
たのは、プロジェクトに協力してくださった方もあり
ました。タイミング的にお声かけはできなかったん
ですが、同じ地域の一員としての側面を強く感じまし
た。これって当たり前のことなんですけど。今回出会
った盲ろう者に対し、自分が「障害」というカテゴ
リだけで考えていたところがあるのだなと思いました。

横井

同じような話でつい最近のことなのですが、別の業
務の中で、出会ったNO-MA近隣の方が「みんなの
“鑑賞”1」に参加した障害のある人のことを、小
さいときから知ってるというんですね。そして、その
ことをぼくに教えてくれたんです。
なぜそんなことが起こるかという、プロジェクトを
伝えるの取り組みの中で作ったブックレットを地域
に配布して、それをご覧になったからなんですね。
今回のプロジェクトでは、インターネットだけではなく
て、紙媒体での記録もしっかりと残し、発信してい
こうという方針で、ブックレットを作りましたが、これ
は、近隣地域の方々には回覧板でまわっていきまし
た。回覧板のなかのブックレットに目が留まったこと
によって、「〇〇さんだ」と気づかれ、それをぼくに教
えてくれたということなんですね。思わぬ縁が生ま
れているなと思いました。

山田

事業自体は「障害」「地域」と分けて進めていま
したけれども、本質的には分けられないものではな
い。障害のある人は地域住民でもある。具体的な
取り組みをしていく上で、カテゴリ化する事でやり
やすくなっている側面はありますが、区切りを取
って俯瞰したときに見える光景もあるように感じ
ました。

アナログとデジタル

山田

このプロジェクトのブックレットが回覧板で回っ
ていったという話になりましたが、かなりアナログな



横井悠

法です。ウェブサイトを立ち上げて動画配信を
続ける一方で、その成果物を回覧板で回してもら
ってました。これははじめに話題に出た、町の住民
たちの二層化、都市部と伝統的地域、高齢者・定
住者層と若年者・移住者層にもつながるポイントの
ように思います。情報発信を担当してもらったのは
赤澤さんでしたが、この点いかが思われましたか？

赤澤

アナログ／デジタルの話題は、コロナ禍の前からあ
る話です。デジタル化が進み、チケットレスにな
ったり、スマホ普及が進んだり。そこで、デジタル
に馴染めない人が切り捨てられるということは出
てくると思います。

しかし、今回のプロジェクトでは内容を考えるとき
から、動画発信やオンラインでの情報発信が主軸に
ありつつも、デジタルに馴染めない層を切り捨てない
ということは意識していたと思います。

とはいえ、ただ単にデジタルで展開したものを紙
媒体に落とすだけではなかったわけですね。コン
テンツ自体も、古くからいる地域住民にとっての
馴染みやすさがあったと思うんですね。ニューズレ
ターをめくって「あ、あの人が出てる！」というロー
カルな発見があって、それは面白かったんじゃない
かと。

横井

デジタルもアナログもデザインはかなり力が入
ってます。ニューズレターの中では、割と写真が大
きく掲載されていると思うんですが、それが結構大
事なことで、このくらい大きな写真だから「あの
人が出てる」という発見がしやすいのかもしれない。

山田創



山田
とても興味深い話ですね。まず、デジタル／アナログ問題でいうと、赤澤さんの言うように、基本的には、技術発展とともにアナログの方は切り捨てられて行ってしまうのだけれども、しかし、このプロジェクトでは、切り捨てられてしまいかねないところへのまなざしを重視していたわけですね。
そして、これは盲ろう者との鑑賞のプロジェクトについても応用して考えられそうだなと思っていて、デジタル／アナログは、非接触的／接触的という構図にも置き換えられるような気がしています。で、ご承知のとおり、コロナ禍を境に、非接触的なものが強まり、接触的な領域は狭まっている。そういう社会構造変化って、「接触」が生きる上で欠かせない盲ろう者にとってはどうなんだろうというのが、このプロジェクトの課題意識にあったと思います。何かが変わることによって、あるいは便利になることによって、手が届かなくなってしまう人たちにに向けた想像は、このプロジェクトの通奏低音として鳴り響いていたのではないかと思います。

アクセシビリティの追求とコンテンツの豊かさ

山田
ニューズレターの画像サイズについても、特にデザイナーさんに指示して大きくしてもらったものではないので、もしかしたら、この通奏低音にデザイナーさんも共鳴したのかな、なんて空想しました。
ところで、写真の大きさを、見やすさにつながると思うんですけど、これって一種のアクセシビリティと言っているのですかね？ 普段の業務上、アクセシビ

リティに関して頭を悩ませることが多いのは石田さんだと思うんですけど、どう思います？

石田
画像の大きさも情報保障と捉えられると思いますし、1つのアクセシビリティといえるかもしれないですね。情報をわかりやすくする、取得できるようにする、ということは、このプロジェクトだけではなくて、他の取り組みでも常々考えてきたことで、それが反映されているところはあると思います。

山田
写真が大きいことってアクセシビリティでもあるし、一方で、ビジュアル的な効果の一つというか、コンテンツの質を決める要素でもありますよね。
なんというか、アクセシビリティを高めていくこと、コンテンツの質を高めることって違うルート上にあるものに思えるときもあります。わかりやすさを追求すること、コンテンツを鋭敏にしていくことって基本的に違うベクトルを向いているようにも感じられるんです。
ですが、たとえば「大きく使われた写真」は、どちらの要素とも切り離せないものとして表出しているわけですね。見た目としても面白いし、わかりやすいというものは当然あって、アクセシビリティの追求とコンテンツの豊かさってわりと共存するのかなと思えますが、この点どう思いますか？

石田
アクセシビリティを狭く捉えると情報保障などの伝え方の問題ですが、今、山田さんがおっしゃったように、わたしもコンテンツの中身にも関わるもののように感じています。
今回に関しては、盲ろう者の方々が、企画検討会議から議論に参加しています。どういうものを作るかという、コンテンツの検討と、アクセシビリティが一致した作り方になっていました。

山田
確かにそうですね。作品の情報を保証するというアクセシビリティを想定すると、作品という中心的存在を盲ろう者という周縁的存在に届けるみたいな発想に尽きてしまう。そうではなくて、今回はコンテンツ成立の内側に盲ろう者が入り込むことによって、作品という中心的存在は解体されていくような感じがありましたね。

実際に、盲ろう者に作品情報を正しく伝達することよりも、対話の内容を重視するという、方針転換がありました(20-31p参照)。これは鑑賞の中心に作品があるということに対する解体的なアプローチでもあったのでしょうか。そんな感じで、コンテンツを考えるときに、障害当事者がいることで必然的にアクセシビリティに対するアプローチも立ち上がってくるというところでしょうか。

石田
そして、結果的にそれは見える・聞こえる人にとっても楽しめるものになったと思います。

横井
こういうコンテンツを一緒に作り上げていくという視点は、少しでずつでも、いろんな文化施設に増えてほしいですね。今の社会を考えるためのものになるのかもしれない。

カテゴリイズを超えて

赤澤
ボーダレスという視点が大事だと思っていて、本当は「障害」を表に出さないというところまでいけば理想なのかなとも思います。ただし、今日の話の中でも出ましたけれども、どうしても「障害」があるかそうでないかということを表に出さないとプロジェクトの意義が伝わらないことは理解しています。盲ろう者との美術鑑賞も、盲ろう者だけを対象としたものではないと思います。障害がない人が見ても面白いものであるはずなのですが、「盲ろう者との」とつくことで、仕方ないのですが、分断が生まれているのかもしれない。

山田
コンテンツにいたってもらうまでの道筋の引き方って、押し引きがありますよね。「障害」と言わないと意義が伝わりづらいけど、言ってしまうと一線が引かれてしまうというか。

石田
赤澤さんがあげた課題は、わたしも感じてきました。そのうえで、実際の鑑賞会の現場などでは、盲ろう者との美術鑑賞、知的障害者との美術鑑賞となっているというよりは、「〇〇さんと見る」みたいな意識になっていったように思っています。



石田瞳

山田
その意識って、わたし自身もプロジェクトを通して身体化していった印象です。「障害」と大きなカテゴリで捉えていたものが、〇〇さんと個別化していったのが、象徴的ですね。でも、アクセシビリティって、究極的には「〇〇さんにとっての」っていうふうな個人にとっての居心地のよさだったりと思うんですね。その意味では、個人化のプロセスはとても重要だと思います。
一方で、地域とアートのニューノーマルの方も、漠然と「地域」と捉えていたものが、横井さんも冒頭に言っていたように、個別の人々との出会いを果たしていくわけですね。これもカテゴリイズを超克する、個人との出会いだと思います。
プロジェクトが、あまりにも個人に寄りすぎるとそれはパブリックな取り組みとしての公平性が失われるので、表向きは普遍的な「障害」「地域」を志向するのでしょうか。そのカテゴリイズの向こう側に、生きている個人がいるということは常々考え続けなくてはならないことなのでしょうね。



アール・ブリュット魅力発信事業 実行委員会

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

この事業の主催団体です。構成団体は次のとおりです。

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー（GLOW））、滋賀県（文化芸術振興課・県立美術館・障害福祉課）、近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、特定非営利活動法人はれたりくもったり、滋賀県立大学、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

第1回実行委員会

開催日時：令和3年7月8日（木） 10時00分から11時30分

場所：滋賀県立男女共同参画センター“G-NETしが”

出席者：12名（オブザーバー含む）



令和3年度の事業計画を共有。視覚障害の方の鑑賞方法について意見が交わされるなど、「今後も高いレベルでの議論を期待したい」といった感想が聞かれた。

第2回実行委員会

開催日時：令和4年1月21日（金） 10時00分から11時15分

場所：滋賀県立男女共同参画センター“G-NETしが”

出席者：8名



令和3年度の事業報告を行い、令和4年度の事業について共有した。誰一人取り残されない鑑賞について話し合われ、BIWAKOピエンナーレとの協力なども提案された。

謝辞

本事業の実施にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。
心からお礼申し上げます。
(敬称略、五十音順)

みんなの“鑑賞”1 プロジェクトメンバー

河原崎未識、外山聖、野原健司、森美菜子、安田真一郎

みんなの“鑑賞”2 プロジェクトメンバー

岡田昌也、岡本克司、北川雅貴、野中美智子、安川雄基

NO-MAご近所、動画なRADIO放送局 出演者

麻生知宏、石居佐代子、大野宏、大山真、岡田昌也、門脇真斗、川村嘉男、
小島加奈子、ジェイド・フレンチ、杉田信也、杉之原千里、田口真太郎、塚本千翔、
外山聖、野中美智子、野原健司、久木茂、久木富久子、藤田昌喜、前田達慶、
水上明彦、宮村利典、森嶋利成、森美菜子、安川雄基、八幡亜樹

企画協力

障害者支援事業所いきいき、NPO 法人しが盲ろう者友の会

ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト

助成：令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

主催：アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

構成団体

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(社会福祉法人グロー(GLOW))、
滋賀県(文化芸術振興課・県立美術館・障害福祉課)、近江八幡市、
一般社団法人近江八幡観光物産協会、特定非営利活動法人はれたりくもったり、
滋賀県立大学、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

実行委員

実行委員長：牛谷正人(社会福祉法人グロー(GLOW)理事長)

副実行委員長：笠原吉孝(NPO 法人はれたりくもったり 理事長)

寺脇希(滋賀県文化スポーツ部文化芸術振興課 主事)

木村司馬(滋賀県健康医療福祉部障害福祉課 主事)

池上司(滋賀県立美術館 学芸課長)

濱本浩(近江八幡市総合政策部文化観光課 課長)

田中宏樹(一般社団法人近江八幡観光物産協会 事務局長)

南政宏(滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科 講師)

福山かおり(滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会 副実行委員長)

報告書 ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト

2022年3月30日発行

制作・発行

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

発行責任者

牛谷正人

(アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会 実行委員長、社会福祉法人グロー(GLOW)理事長)

イラスト スケラッコ

デザイン 有佐祐樹

発行所

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

(事務局)

社会福祉法人グロー(GLOW)法人事務局芸術文化部

〒521-1311

滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2

TEL. (0748)46-8100

FAX. (0748)46-8228



